

『心ない世界』

作者 浅羽一

例えば、くじや抽選で外れたと分かった途端、「やらなきや良かった」とか「つまらない」と怒ったり、参加賞として渡された景品を「こんなものいらぬ」と突き返す人が、理解こそ出来るものの共感出来ない。百歩譲って宝くじや競馬なんかならまだ良い。最初にある程度のリスクを自ら負っているのだから、せめてその金額分くらいは悔しがらぬ。最初は当然とまでは言えないものの自然なものであるのかも知れない。でも、スーパーや商店街の抽選会なんかで、買い物した金額幾らに対して何枚の抽選券を貰えてみたいやつは、言ってみれば単なるおまけ、或いは店側のサービスでしかない。だとすれば、そもそも無くても当たり前のものなのだから、仮に貰えたものが安物のポケットティッシュ一つであっても、つまりそれは決して損などではなく、むしろその分の得をしているのだ。確かに、一等の景品と参加賞の景品では差もあるだろうけれど、それはあくまでも当人の運の有無が問題であって、いわば単なるお遊びの結果に過ぎない。だからこそ、良いものが当たれば喜んで、そうでなくても怒ったり店員なんかに八つ当たりしたりせず「残念だったね」。でも、ありがとう」なんてのんびり笑って応える方が、遥かに愉快に日々を送れると思う……。のだが、酒の席やなんかでたまにこんな話をする時、大抵の場合、「それは正論かも知れないけど、普通の人はそうじゃない」なんて言われたりする。

なるほど、それもある意味で正しい話だ。そしておそらくそうだからこそ、僕は少しずれた人間だと誤解―彼らにとってみれば正解なのかも知れないが―される時がある。中でも特に男女間の付き合い方に於いて、僕はしばしばそんな風に扱われる。

正直な所、僕にはあまり誰かを嫌いになると言う感情が分らない。抽選会の話と一緒に、心理学的に理解する事なら出来る。でも、それをあくまでも自身の感情として抱く事が出来ない。

こんな経験がある。大学生だった頃、幸せな事に二つ年下の後輩から告白されて、男女交際に発展した。愛、と言うと大げさかも知れないが、一緒にいられば楽しくて、笑ってくれば幸せで、僕は素直に彼女を好きだったし、また健康な男子としての欲求もそれなりにあった。だから、ある時、デートの帰りに彼女を家まで送っていった際、可愛らしく手を振る姿を見ていたら何となくそのまま別れてしまうことが惜しくなって、じゃあせめても彼女に軽くキスをしようとした。すると、彼女はふいと顔を逸らし、「そう言う気分じゃないから」。

本音を言えば、寂しいと思ったし、悲しいと感じた。でも同時に、その言葉通り向こうには向こうで気分もあるだろうし、だから残念だったし、何か気に障る事をしてしまったかなとも考えたけれど、かといって「何でだよ」と怒ったり、ましてやそれで嫌いになったりなんてしなかった。

でも、後日、友人にこの話をする時、彼は呆れた表情で「俺なら絶対に別れるな」とまて言いつつ切った。「そんな相手の気持ちを考えない女なんて、最悪じゃん」とまで。

いやいや、それはさすがに極論だろうと僕の方こそ呆れたのだが、周囲にいた他の男友達も多かれ少なかれその友人に近い発言をした。「気分が乗らない時はあるだろうけどさ、それでも断り方はあるだろ」と言う風に。ちなみに、しばらくして僕はこの彼女にあつさりとは振られてしまう。

（もうムリ もう別れて）

携帯電話の小さな画面に表示された最後のメールはたったそれだけで、僕もまた彼女の

気持ち冷めていっていると薄々感じていたものの、やはりそれにはショックを受けたし、寂しくなって悲しくなった。これと言って酷い仕打ちをした覚えはなかったし、ましてや変に気持ちを押しつけるような真似も、おそらくはしていないと思えたから、どうしてだよと辛くなった。だけど、だからって嫌いになりはしなかった。それはただ自分が好きなままで相手に去られただけだからと思われるかも知れないし、或いは単に未練だろと言われるかも知れないが、それでも僕は今となっても尚、やはり彼女に対して憎らしい気持ちを抱いていない。

また、他にもこんな事があった。

「あなたは私が喜ぶ事を言ってくれるけど、でも、そうやって言葉にされる度に、嬉しくなるよりも信じられなくなるの」

僕はあまりと言えばあっさり「好きだ」とか「愛している」と伝えてしまいうらしい。でも、それは決してその場しのぎのお世辞や言葉遊びでなく、本当に素直にそう想っているからこそ言葉なのに、「そんな簡単に口にされると軽く聞こえる」そうだ。

なるほど、分からなくはない。要するに慣れてしまうという事だろう。ありがたみが薄れると言い換えても構わない。けれど、先に「私は想ったらちゃんと気持ちを伝えてくれる人が好きだから」と言ってきたのもまた彼女の方だった。最終的に僕を振った彼女の最後の言葉は、「あなたには心がない」だった。僕は部屋を出て行く彼女の背中を見送りながら、最初にそんな僕を好きだと言ってくれたのは君じゃないかと悲しくなって、寂しくなって、けれどやはり憎らしいとまでは思えなかった。

詰まる所、僕には誰かを憎むと言う流れが今ひとつ共感出来ないのと同様に、一度でもちゃんと好きになった相手を嫌いになってしまえるタイミングが分からないのだ。極端に言えば、友人だと思っていた男の子と恋人が密かに親密な関係になっていたり、はたまた恋人が僕に黙って部屋に見知らぬ男を連れ込んでいたと発覚したりした時、とてつもなく悲しくて、苦しくて、心の痛みを思い出してしまいう事が辛くて頭の中から消してしまいたいと感じる瞬間があったとしても、だからって「憎らしい、復讐したい、一生恨んでやるぞ」なんて気持ちはさらさら芽生えてこないのだ。むしろ、僕と別れた後でその恋人が幸せになっていると聞けば、とても素直に良かったなと祝福さえ出来る。しかし、その結果、それは僕が冷たい人間だからだと、もしくは他人に無関心なだけだと言われる羽目になる。全くもって寂しくて悲しい話だと思う。仮に、自分と相容れない考え方をする人間がいたとして、そんな相手と喧嘩をすれば「心ある」人で、そう言う相手の存在をただ残念なものとして受け止めてしまうと「心ない」人であるとするのなら、なるほど僕は皆が言う通り心ない人間なのかも知れない。でも、だとしたら彼女たちの言う「心」とは一体どんなものなのか。

表があれば裏がある、それは必然だ。となれば、「嫌い」が無い人間には「好き」も無い、それが当然なのか。他者の悪口を言わない人間から褒められてもまるで嬉しくなくて、誰かをひがまない人間の抱く憧れは空虚な幻想でしかなくて、不幸を経験した事のない人間が感じる幸福はどれも等しく無価値なのか。

いやいや、それはさすがに暴論だろう。確かに、傷ついた事のある人間であれば他人の痛みも分かりやすいけれど、かといってそれはずっと大切に育てられて幸福に包まれている人間の日々を否定する要素には成り得ない。もしもそんな理論が当然のごとく成立する

世界であったとすれば、おそらく僕は何よりもまずこの世界そのものを嫌いになっただけだ。

今、僕の傍らでは大切な人がソファにもたれてやすやすと寝息を立てている。外見にも内面的にも魅力ある女性で、彼女と共に過ごす時間は僕にとって間違いなく自然と頬がほころぶような温もりを感じられるものだ。でも、だからこそ、もしもまた失ってしまったらと考えるだけでも恐ろしい。

ある程度の嘘は必要な世の中なんだろう、それはおそらく正解だ、正道でなかったとしても。そしてまた言うまでもなく、僕は完全無欠の正直者なんかじゃ決してない。都合が悪くなれば嘘で誤魔化す時もあるし、面倒を避ける為に思ってもいない意見を口にする場合だってある。

だから難しく考える必要なんて無いのかも知れない。それどころか、それはいつそ「相手の為を思いやっつての行動だ」なんて詭弁こそ必要であるのかも知れない。

私の事好き？

大好きだよ。

私、あの人が嫌いなもの。

俺もあの人が嫌いだよ。

どうしてそんな酷い事を言うのよ。

いや、お前の方こそふざけんなよ。

私達の間には隠し事は止めようね。

俺達の間には隠し事なんて無いよ。

たまにはちゃんと言葉にしてよ。

君の事だけを心から愛してるよ。

：案外、難しくはない。ほんの少し疲れるだろうだけだ。

全てを真実で固めるのでなく、一切に嘘を吐くのでなく、本当と本当の隙間に「思いやり」を埋めて一見すれば平らで滑らかな形を作る。そしてその上に幸せな日々を積んでいく。

シャツ代わりのシャツの縁から小さな鼻をちょこんと覗かせて、彼女は静かに眠っている。長いまつげに前髪が引っかかり、さらりとした黒色に変な風に顔を隠している。

勿体ないと思った。だから柔らかい黒髪の間隙にそっと指を差し込んで、額を開くようにかき分ける。

愛らしい寝顔だった。改めて失いたくないと想った。その為になら、心の中の余計な部分なんてなくせると思った。そうすれば僕もまた「心ある」人になれるに違いない。

と、指先が肌に触れてくすぐったかったのか、彼女がかすかに声を漏らして首を振った。

「大丈夫だよ」

僕は指を離して、その代わり囁くようにそう言った。すると彼女はうつすらと目を開けて寝惚けたみたいに微笑みながら、再び目を閉じた。

多分、いや、きつと、こうして僕はいつの日かこの世界を嫌いになっていくんだらう。そんな未来を予想しながら、とりあえずもう一度、今度は唇に触れようと思った。